

二〇二二年三月二十八日（長岡天満宮参加者一四人）

水上橋駆ける吾子らに風光る	ひかり
さざ波の影す水亭春障子	"
たもとほる池塘の梅の盛りかな	"
さざなみの池駈けめぐり風光る	"
老梅の枝上がりして花まばら	"
行厨ににぎはふ梅のベンチかな	"
乙訓の風の序破急竹の秋	菜々
拝殿を吹き抜けて梅匂ひけり	"
神苑の汀嵩なす春落葉	"
口ずさむ菅公の碑に梅にほふ	"
梅東風にさざ波遊ぶ池の面	宏虎
鳥語降り浄土となりし梅の苑	"
パレットの彩とりどりに梅描く	"
唐金の梅鉢模様春日燦	わかば
橋の下走るは魚影水温む	"
錦水亭浮かぶ脊山の臍かな	"
芽柳の揺れる方へとさざなみす	明日香
梅林の丘を統べをる椎大樹	"

病む足を励ましつつや青き踏む	"
乙訓の山重なりて薄霞	よし子
神苑の御手洗に掬む春の水	"
そぞる歩に梅東風匂ふ宮の道	小袖
撫で牛のまなざしの先梅盛る	"
うららかやメタボの鯉の集ひ来る	満天
春しぐれ水上橋をもとほれば	"
百千鳥高枝渡りくりかへし	つくし
梅園に絵筆走らす老画伯	せいじ
春風の水上橋をひとめぐり	百合
菅公の望郷の碑に百千鳥	きづな
下萌ゆるベンチに集ふ昼餉かな	はく子
杓置きは瑞の太竹梅の宮	"

吟行句会みの選

二〇二二年三月二十八日（長岡天満宮参加者一四人）